

---

## 1940年代後半のドイツ文学におけるユダヤ人迫害描写

ー ヴォルフガング・ケッペン、エリザベス・ランゲッサー、  
ヘルマン・カザックに見られる集団的語り ー<sup>1)</sup>

福田 緑

ホロコーストをどのように語るることができるのか、という問題は繰り返し議論され、今日も議論的となっている。ユダヤ人の歴史家ダン・ディーナー (Dan Diner) は、ホロコーストの記憶研究の観点から、ホロコーストの歴史の語られ方を分析し、民族や国家によって異なる集団的な「語り」(Narrativ)があることを指摘している。<sup>2)</sup> 1940年代後半に書かれたドイツ文学には、どのような集団的語りが見られたのだろうか。

本稿では、ヴォルフガング・ケッペン (Wolfgang Koeppen) の小説『穴蔵の手記』(1948)、エリザベス・ランゲッサー (Elisabeth Langgässer) の短編『再生』(1946-49)、ヘルマン・カザック (Hermann Kasack) の小説『流れの背後の市』(1947)を取り上げる。以上の作品では、ホロコーストという人間の手による出来事を、人間の力を超えた<自然>に同一化させて物語っている点が共通している。ケッペンの小説『穴蔵の手記』においては、迫害されたリットナーの立場から、ナチスの侵攻による生活の変化が嵐や雨のような自然現象の<自然>に譬えて語られ、ランゲッサーの短編『再生』では、ナチスの暴力が救済されていない<自然>として描かれる。また、カザックの小説『流れの背後の市』では、ホロコーストを含めたすべての迫害や虐殺が、永遠の法則としての<自然>のもとで起きた出来事として語られる。これらの作品においては、人間の力を超えた<自然>という枠組みのもとでホロコーストを語ることにより、ホロコーストに対する人間の責

---

1) 本稿は、IVG 国際ゲルマニスト学会 (於: ワルシャワ大学、2010年8月4日) における口頭発表の内容を日本語に書き改め、加筆修正したものである。

2) Diner, Dan: Der Holocaust im Geschichtsnarrativ – Über Variationen historischen Gedächtnis. In: Braese, Stephan (Hrsg.): In der Sprache der Täter. Opladen (Westdeutscher Verlag) 1998, S. 13-30.

任が曖昧にされるという問題が見られる。同時期に書かれた、背景の異なる作家の作品に、このような「語り」が共通して認められることから、戦後間もないドイツ文学において、集団的語りの一例であったと考えられる。

## 1. ヴォルフガング・ケッペン

小説『穴蔵の手記 (Aufzeichnungen aus einem Erdloch)』は、1948年にヤコブ・リットナーの名前で出版されたが、1992年、ヴォルフガング・ケッペンがタイトルを『ヤコブ・リットナーの穴蔵の手記 (Jakob Littners Aufzeichnungen aus einem Erdloch)』と改め、自身の作品として再出版し、議論を呼んだ。後に、ヤコブ・リットナーは実在のユダヤ人切手収集家であり、リットナーの実体験を語った手記がケッペンの作品の土台であったことが明らかにされた。2002年にリットナーの手記も出版され、<sup>3)</sup> ケッペンが手記をどのように書き換えたのか比較することが可能である。ケッペンによる書き換えの特色を考察することにより、ケッペンがどのような世界観を描き出そうとしたのか明確にすることができる。

第一の特色は、リットナーの信仰心をめぐる部分の書き換えである。実在のリットナーのユダヤ人意識を変更することにより、運命的なく自然に翻弄されるリットナー像が生み出されていく。まず、リットナーの自伝的な冒頭に対し、ケッペンは主人公リットナーが新聞を読む場面から物語を始め、歴史的、政治的状況をめぐる見解を独白させている。実在のリットナーは迫害以前からユダヤ人としての明確な自覚を持っていたが、ケッペンの描くリットナーは迫害を通して、ユダヤ人の自覚を持つことになる。

ユダヤ人の状況とは何を意味するのでしょうか？私は自分がドイツ民族の中で、特別なよそ者のグループに属しているとは思いません。(中略)私はしかし、自分を他のすべての人間と同じ人間だと考えています。私は市民であり、納税者であり、ある種の快適さを愛しており、私は犯罪者ではありません。私の出生によって、私がある人種に属しているといい、罵倒する、このプロパガンダ全体が途

3) Littner, Jakob: Mein Weg durch die Nacht. Hrsg. von Roland Ulrich u. Reinhard Zachau. Berlin (Metropol) 2002.

方もない誤解に違いないのです。<sup>4)</sup>

このように、主人公リットナーは、自身が他の人々と何ら変わりのない人間であることを強調し、ナチスの人種主義によってユダヤ人と見なされるのは誤解であると主張している。しかし、実在のリットナーは、ユダヤ教徒の立場から、自身の苦難と生還を神の計画として理解していた。

それは、その中に明白に認めることができる神からの暗示である。神のみがすべての死の苦しみの中で私を導いたのだ。神であり、他の何者でもない。<sup>5)</sup>

リットナーの手記には、このようなユダヤ教徒としての立場が貫かれており、すべての苦難と生還をユダヤ教徒の立場から位置づけられている。それに対し、ケッペンは、リットナーが自身の体験を神からの暗示として解釈している箇所を大幅に削除し、その代わりに、様々な場面で自然現象のメタファーを書き加えている。リットナーが警察に連行される場面は、ケッペンによる劇的な加工が明らかかな箇所である。リットナーの手記では9行の場面に、ケッペンが主人公リットナーの心情を書き加え、2ページに渡って描いている。

リットナーの手記：

1938年10月のある日、早朝5時、私の家に制服を着た警官が現れ、私をベッドから連れ出し、身分証明書を確認した後、「あなたを逮捕しなければなりません」と言った。<sup>6)</sup>

ケッペンの小説：

玄関のベルが鳴ったとき、まだ外は真っ暗でした。私は目を覚まし、早朝5時になったばかりなのを知りました。(中略)私は偶然、玄関ホールにある帽子掛けの鏡に映っている自分を見ました。(中略)危険にさらされ、故郷を追われ、病

4) Koeppen, Wolfgang: *Aufzeichnungen aus einem Erdloch*. Berlin (Kupfergraben) 1985 (urspr. München (Verlag Herbert Kluger) 1948), S. 8.

5) Littner, S. 169.

6) Littner, S. 15.

気の自分を見ました。私の市民的な生活の象徴である私の家は、いわば私の目の前で音を立てて壊れてしまい、嵐が私を無保護な状況へと吹き飛ばしたのです (und ein Sturm wehte mich hinaus in das Ungeschützte)。<sup>7)</sup> (下線部は福田による)

ここでは、主人公リットナーを無保護の状況へ追いやった「嵐」(Sturm)がメタファーとして登場し、刑務所の中で、彼が「雨に降られたような」ものだと考えている場面が続く。

私たちの誰も罪の自覚がありませんでした。私たちは雨に降られたようなものでした (wir wurden wie vom Regen getroffen)。ユダヤ人として生まれたという偶然と、世界史の成り行きが私たちをポーランド国籍にしたという理由で咎められているのです。<sup>8)</sup> (下線部は福田による)

このように、ドイツ人と変わらない人間として生活していた主人公リットナーが、嵐や雨のような自然現象に譬えられる力によって、運命を決定されていく様子が描かれている。ケッペンの小説は、自然現象の比喻によって、人間の所業である戦争や迫害の責任を曖昧にし、加害者も含めたすべての人間を自然の支配下にある存在として、運命論的に物語っているとと言える。

また、ケッペン、実在のリットナーが記した信仰的な解釈の大半を削除したにも関わらず、加害者への慈悲に関する部分は小説に取り入れ、神のみが非人間性を裁くことができるという言葉をもって、小説を締めくくっている。<sup>9)</sup> ケッペンは加害者への裁きは神に委ね、自然や神という人間の力を超えた存在のもとで起きた出来事として戦争やユダヤ人迫害を描いているのである。

後に言及するカザックの小説『流れの背後の市』が、1940年代後半に高く評価されたのに対し、ヤコブ・リットナーの名前で発表された小説『穴蔵の手記』はほとんど読まれることはなかった。<sup>10)</sup> ホロコーストを生き残った一人のユダヤ人

---

7) Koeppen, S. 9f.

8) Koeppen, S. 14f.

9) Koeppen, S. 148.

10) Ulrich, Roland: Metamorphose eines Textes. Vom Report Jakob Littners zum Roman Wolfgang Koeppens. In: Littner, Jakob: Mein Weg durch die Nacht, 2002, S. 199.

の苦難に満ちた物語は、戦後間もないドイツにおいて、注目を集めるテーマではなかった。ケッペンが1992年に再度、小説『ヤコブ・リットナーの穴蔵の手記』を自身の作品として発表したことにより、この作品は記憶の場として考察されるべき価値を持つようになったと言える。加害の側に属するドイツ人作家が、迫害されたユダヤ人の「私」として物語を書き、「私は誰も憎みません。罪ある人も憎みません」<sup>11)</sup>と述べた点が問題とされ、誰がどのようにホロコーストを語ることができるのか、という議論を再度、呼び起こした作品である。

## 2. エリサベス・ランゲッサー

ランゲッサーは、第二次世界大戦の直後から、ナチスによる迫害をテーマに作品を発表した作家である。ランゲッサーの作品の中で、ナチスの迫害を自然の力として描いている作品は、1946-49年に書かれた短編『再生 (Wiedergeburt)』<sup>12)</sup>である。

主人公のドイツ人の男爵夫人ディアナは若い未亡人であり、彼女の夫は「粗暴な猪 (wüste Wildsau)」<sup>13)</sup>と表現されている。ディアナは、夫の「飲み仲間 (Saufkumpan)」<sup>14)</sup>であった看守から拷問を受け、虐待されていたポーランド人の自由運動家カシミアに出会い、彼を強制収容所から救出する。

まず、この物語において、ディアナとカシミアは、墮罪以前アダムとエヴァ、男と女という枠組みで語られるという特徴が見られる。

彼らはドイツ人としてでもなく、ポーランド人としてでもなく語り合っていた。  
神が創造した人間として、男と女という起源において、ということである。<sup>15)</sup>

ようやく訪れた春の日、5月中頃という季節の設定や、鋸や木片の立てる音を

11) Koeppen, S. 148.

12) Langgässer, Elisabeth: Wiedergeburt. In: Saisonbeginn. Erzählung. Stuttgart (Reclam) 1981, S.49-67. この短編集は、1946-49年の間に書かれた作品を収録しているが、„Wiedergeburt“はランゲッサーが没した翌年、1951年に出版された。Langgässer, Elisabeth: Geist in den Sinnen behaust. Mainz (Matthias-Grünwald) 1951.

13) Langgässer, 1981, S. 49.

14) Langgässer, 1981, S. 51.

15) Langgässer, 1981, S. 60.

「ムクドリの群れのさえずり (Gezwitscher einer Starenwolke)」に、自由運動家たちの叫び声を「ガチョウの叫び声 (Schreie der Wildgans)」に譬えるという比喻にもエデンの園を思い起こさせる効果がある。<sup>16)</sup> このようにして作り出された墮罪以前の無垢な世界を背景として、ディアナとカシミアの会話から、ディアナが夫の暴力の被害者であったことが明らかになる。ディアナも夫の暴力の被害者であったことから、ドイツ人という加害者の側に属するディアナが、カシミアと同様に罪のない存在に置き換えられることになるのである。ディアナの夫であるドイツ人男爵の肖像画の描写において、夫の暴力は、救済されていない自然の力として表現されている。

たくましい顔立ちが持つ斜めに向けられた青い目のまなざしには、あらゆる訪問者を魅了する力があり、とりこにした。口元は官能的だが、下品ではない。残酷ではないが、手には強さが満ちている。(中略) 肖像画全体が、ほとんど苦痛を感じさせるほど野生的で、非人間的な暴力、すなわち、救済されていない自然の力の表れであるが、かつては恐らく救済を必要とし、それどころか、救済が可能であった力である。(Das ganze Porträt war Ausdruck einer fast schmerzlich wilden, unmenschlichen Gewalt; einer Naturkraft, die nicht erlöst, jedoch in früheren Zeiten vielleicht einer Erlösung bedürftig und sogar zugänglich war.) (下線部は福田による)<sup>17)</sup>

ランゲッサーのキリスト教的な世界観によれば、人間や自然は、神の創造の際には善であったが、アダムとエヴァの墮罪以降、滅ぶべき存在となった。<sup>18)</sup> 自然の力も救済される必要のある力であり、ディアナの夫および彼の飲み仲間であった強制収容所の看守の非人間的な暴力は、救済されていない自然の力と見なされている。ディアナもまた、カシミアに出会うまでは、救済されていない側に属していた。何故、自分を救出するのかというカシミアの問いに、ディアナは以下の

16) Langgässer, 1981, S. 50f.

17) Langgässer, 1981, S. 56.

18) 創世記 1 章 31 節。ローマ書 8 章 20、21 節。山口昇監修：エッセンシャル聖書辞典（いのちのことば社）1998, 498 頁参照。高橋三郎：ロマ書講義 III（修文社）1962, 136 頁参照。参照文献においては、人が神の意思に背いた時から、罪と死が全人類におよび、被造物全体は虚無と滅びに服し、それゆえに被造物全体は購いによる滅びからの救いを待ち望んでいると解釈されており、ランゲッサーの世界観に合致する。

ように答えている。

わたしは善ではありません。わたしは悪でもありません。わたしたち皆がそうであるように、と彼女は本来、答えなければならないはずだった。しかし、彼女はできなかった。(中略)「たぶん、神が私にそうさせたいと思ったから。」と彼女は何も考えずに言った。<sup>19)</sup>

自分は善でも、悪でもなく、神がディアナを善としたかった、という答えは、この2年後、物語の締めくくりとなる、司祭に対する告白の場面では、明確な自覚となっている。

私は彼を知る日まで、まったく非情になっていました。私は一自分自身に対してさえ一憎しみでいっぱい、愛や人間性のかけらもありませんでした。(中略) 私は脱走者を人間にしました。彼は私を人間にしました。私がそうなるようにと神が望んだからです。<sup>20)</sup>

カシミアを救済するという善行は、ディアナの救済をも意味しており、その善行は、本来、人間を善として創造して創造した神の意思によるものと主張されている。暴力を自然の力と見なし、救済を神の意思とすることにより、人間の意志や責任は不問に付されていると言える。

このように、この物語では、ナチスの強制収容所で出会ったカシミアとディアナを、墮罪以前の無垢な男と女の枠組みに組み入れ、ディアナを夫の暴力、すなわち、救済されていない自然の力の被害者として描いている。さらに、善行によってディアナが救済された自然の側に移行するという構造により、加害者と被害者の境界線が失われている。

ランゲッサーは、自身の娘がアウシュヴィッツ強制収容所に移送された経験を持ち、1940年代後半、ナチスのユダヤ人迫害のテーマを重点的に取り上げた作品<sup>21)</sup>を

---

19) Langgässer, 1981, S. 63f.

20) Langgässer, 1981, S. 66.

21) 短編集„Saisonbeginn“に収められた作品の多くが、ナチスのユダヤ人迫害のテーマを重点的に取り上げている。

発表した。同時期に、短編『再生』を書いていたことは、ナチスによる迫害を人間の力を超えた存在のもとで起きた出来事として描く「語り」が戦後初期の時代の一つの手法であったことを示している。

### 3. ヘルマン・カザック

カザックは、1947年、小説『流れの背後の市 (Die Stadt hinter dem Strom)』を発表した。<sup>22)</sup> 1949年にフォンターネ賞<sup>23)</sup>を受賞したこの作品は、1940年代後半のドイツ文学を代表する作品と言える。

主人公ロベルトは、ある都市で文書保管人として働くことになる。後に、この都市が死者のための都市であり、まだロベルトが現実の世界で生があるために、死者の都市で権威を持っていることが明らかになる。この作品において、虫や草木などの自然物は、廃墟や死の醜さを描き出す作用をしている。しかし、〈自然〉はさらに重要な意味合いを持つものであり、この小説の世界観の柱となっている。ロベルトが踏み入った世界は、時間を超越した空間であり、ロベルトと市長の会話から、〈自然〉の位置づけを読み取ることができる。ロベルトは直接、市長と対面することはできず、スピーカーを通して市長と対話することになる。

(略) ロベルトは即座に言った。「生命は原因と作用という法則よりも高い法則のもとにあるということです。」

「最も簡単な答えとしては」と声は言った。「精神は自然であるということだ。」

「しかし、この法則は」とロベルトは叫んだ。「すべての人間がそのもとにある法則は、百年前、千年前と同様に今日も変わらず、この法則の前では、あらゆる時を通じて、すべての生命は同一なのです！」<sup>24)</sup>

このように、自然と精神は同一視され、自然は永遠に変わらない根本法則として位置づけられている。ランゲッサーのキリスト教的な自然観とは対照的に、カ

---

22) Kasack, Hermann: Die Stadt hinter dem Strom. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1996.

23) フォンターネ賞は、自由とヒューマニティという民主主義の理想を、芸術的に、特に説得力に富む手法で表現している作品に与えられる賞であり、文学の部門では、カザックが最初で最後の受賞者である。

24) Kasack, S. 27.



ザックの世界観の背景には、死者の国へ旅をするギリシャ神話やダンテの神曲の影響が見られる。<sup>25)</sup> また、カザックは、人間の世界を超越した永遠の法則という観点から戦争や虐殺についても語り、すべての殺戮を、永遠に繰り返される歴史の一部として扱っている。

同様に黒い仕事着の別の男が彼らの未来の典型について、歴史から語った。古代ローマのキリスト教徒迫害、ヨーロッパ諸国におけるユダヤ人迫害、中世の異端審問と魔女裁判、バルテルミの夜、奴隷市の黒い象牙、中国の内乱、革命裁判、東洋と西洋における信仰者や不信者の大虐殺について (略)<sup>26)</sup>

ユダヤ人迫害もまた、魔女裁判や内戦などと並列して取り上げられ、永遠の法則の枠組みに組み込まれているのである。さらに、自然は加害者を罰する存在として描かれている。ロベルトは、第二次世界大戦中のドイツ人兵と思われる死者に以下のように述べている。

というのも、自然は欺かれはしないからだ。無意味な破壊の道具となる者は一君たちのことを考えてみるがいい—自らも無意味に破壊させられるだろう。<sup>27)</sup>

このように、自然は欺かれることなく、無意味な殺戮に走った者たちは、同じように無意味に滅ぼされると述べられているが、一方で、ドイツ人兵士たちも「道具」(Werkzeug) と表現され、「自身を乱用させ、ヨーロッパの墓になった」<sup>28)</sup> 存在とされている。兵士たちは、無意味な破壊を行なった加害者として、自然に罰せられる存在でありながら、同時に、兵士たちは自身の力を超えた何ものかの「道具」として位置づけられ、被害者の一面を持ち合わせている。<sup>29)</sup>

25) Bahr, Ehrhard: Metaphysische Zeitdiagnose: Hermann Kasack, Elisabeth Langgässer, Thomas Mann. S. 139. In: Wagener, Hans (Hrsg.): Gegenwartsliteratur und Drittes Reich. Stuttgart (Reclam) 1977. S.133-162.

26) Kasack, S. 237.

27) Kasack, S. 292.

28) Kasack, S. 292.

29) Bahr, S. 140. パールも、この小説において、ナチス犯罪がコスミックな出来事に組み込まれ、罪あるもの、罪のないものが均一化され、ナチスの虐殺がやむを得ないコスミックな出来事として描かれている点を指摘している。

このように、カザックの小説においても、すべての人間や出来事は、永遠の自然という人間の力を超えた根本原則のもとに位置づけられ、加害者と被害者の境界が曖昧にされ、ナチスのユダヤ人虐殺の責任が問われることはなかった。

#### 4. 結 論

本論考では、1940年代後半に書かれた3人の作家の作品を考察し、異なる観点や立場からではあるが、人間の力を超えた<自然>のもとで起きた出来事としてホロコーストを物語る「語り」が見られることを確認した。ケッペンは、人間を自然の支配下にある存在として位置づけ、迫害されたユダヤ人リットナーの経験を運命論的に物語った。ランゲッサーの作品では、キリスト教的な観点から、ナチスの暴力は善行によって救済される自然として描かれ、神の創造物である男と女という枠組みにおいて、ドイツ人男爵夫人によるポーランド人自由運動家の救出が語られた。さらに、カザックの作品では、人間の世界を超越した永遠の法則としての自然という観点から、ユダヤ人迫害が様々な殺戮と同様に、繰り返される歴史の一部として語られた。

これらの作品は、人間が起こした戦争や迫害の責任を<自然>に転嫁し、人間の力を超えた出来事として捉えている。ホロコーストを<自然>という枠組みにおいて語る手法は、1940年代後半のドイツ文学において、集団的な語りの一例であったと言える。

作家の立場や受容状況は異なるが、同時期に見られた<自然>を用いてホロコーストを物語るという手法は、1960年代に終わりを告げたと考えられる。戦後初期から1950年代のドイツ文学において、ホロコーストのテーマはほとんど取り上げられなかったが、1960年代初頭のアイヒマン裁判やアウシュヴィッツ裁判により、ナチス犯罪に対する世間の意識が高まり、文学作品におけるホロコースト描写について、激しい議論がなされるようになった。<sup>30)</sup> 1970年代には、ドイツのみならず、アメリカなどにもホロコースト博物館、文書館、記念碑が建てられ、ホ

30) 特に、1965年に上演されたペーター・ヴェイスの『追究』は、分岐点となった作品である。この戯曲は、ナチス迫害を人間の所業、制度的な犯罪として描いたが、ホロコーストの原因をナチスの人種主義ではなく、資本主義に見ているという点で激しい批判を受けた。これらの議論からも、ホロコーストをナチスの政策による結果として描かない「自然化」の終焉を見ることが出来る。

ロコーストが歴史資料によって語られるようになり、人間の力を超えた〈自然〉という枠組みによってホロコーストを語る「語り」を終焉させたと言える。

### 参考文献

- Bahr, Ehrhard: *Metaphysische Zeitdiagnose: Hermann Kasack, Elisabeth Langgässer, Thomas Mann*. In: Wagener, Hans (Hrsg.): *Gegenwartsliteratur und Drittes Reich*. Stuttgart (Reclam) 1977. S.133-162.
- Diner, Dan: *Der Holocaust im Geschichtsnarrativ – Über Variationen historischen Gedächtnis*. In: Braese, Stephan (Hrsg.): *In der Sprache der Täter*. Opladen (Westdeutscher Verlag) 1998. S. 13-30.
- Kasack, Hermann: *Die Stadt hinter dem Strom*. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1996.
- Koepfen, Wolfgang: *Aufzeichnungen aus einem Erdloch*. Berlin (Kupfergraben) 1985, (urspr. München (Verlag Herbert Kluger) 1948).
- Langgässer, Elisabeth: *Wiedergeburt*. In: *Saisonbeginn. Erzählung*. Stuttgart (Reclam) 1981. S.49-67.
- Littner, Jakob: *Mein Weg durch die Nacht*. Hrsg. von Roland Ulrich u. Reinhard Zachau. Berlin (Metropol) 2002.
- 高橋三郎：ロマ書講義 III（修文社）1962.
- 山口昇監修：エッセンシャル聖書辞典（いのちのことば社）1998.

（ふくだ・みどり 学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程）

## **Beschreibungen der Judenvernichtung in der frühen deutschen Nachkriegsliteratur der 1940er Jahren**

Zu einem kollektiven Narrativ bei Wolfgang Koeppen,  
Elisabeth Langgässer und Hermann Kasack

MIDORI FUKUDA

Der jüdische Historiker Dan Diner weist darauf hin, dass unterschiedliche Kollektive wie Völker oder Nationen auf unterschiedliche Weise den Holocaust erinnern und diese Erinnerung auf eine bestimmte Weise, in bestimmten Narrativen, ‚erzählen‘. In meinem Beitrag untersuche ich einige Beispiele von Holocaust-Beschreibungen in der frühen deutschen Nachkriegsliteratur. Wolfgang Koeppen, Elisabeth Langgässer und Hermann Kasack erzählen den Holocaust, so meine These, mit dem Schema der ‚Natur‘, die den Menschen überlegen erscheint, wodurch die menschliche Schuld am Holocaust ausgeglichen und getilgt werden kann. Die Weltanschauung, durch die der Holocaust nicht mehr in den Bereich der menschlichen Verantwortung gestellt wird, wird hier als ein kollektives Narrative in der frühen deutschen Nachkriegsliteratur bezeichnet.

Wolfgang Koeppen schreibt den Roman „Aufzeichnungen aus einem Erdloch“ (1948) basierend auf dem autobiographischen Manuskript des jüdischen Briefmarkenhändlers Jakob Littner. Durch den Vergleich der Holocaust-Beschreibungen in Koeppens Roman mit Littners Originaltext kann man sehen, dass Koeppen den größten Teil der Passagen, in denen es um den gläubigen Charakter Littner geht, wegstreicht. An die Stelle der göttlichen Vorsehung tritt bei Koeppen die Natur; Koeppen spricht Littner einen an Naturphänomenen, wie „Sturm“ oder „Regen“, ausgerichteten Fatalismus zu. In diesem Roman legt Koeppen eine Verwechslung von Natur und Geschichte nahe.

In der Erzählung „Wiedergeburt“ (1946-49) von Elisabeth Langgässer rettet die deutsche Baronin Diana von S., die eine junge Witwe eines brutalen Ehemanns ist, einen polnischen Freiheitskämpfer namens Kasimir, der im KZ gefoltert und misshandelt wurde. Diana und Kasimir werden im Schema von ‚Mann‘ und ‚Weib‘ erzählt und sie be-

gegenen sich in aller biblisch-paradiesischen Unschuld, gleichsam als Adam und Eva vor dem Sündenfall. Vor allem wird Diana, die ja eigentlich dem ‚Tätervolk‘ der Deutschen angehört, durch die Misshandlungen ihres gewalttätigen Mannes in ‚Unschuld‘ verwandelt. Die ‚Gewalt‘ ihres verstorbenen Mannes wird von Langgässer unter dem biblischen Aspekt als ‚unerlöste Naturkraft‘ angesehen. Außerdem kann man die Aussage erkennen, dass Diana durch ihre ‚gute Tat‘, nämlich die Befreiung Kasimirs, selbst ‚erlöst‘ werden kann – und das heißt, dass sie von der unerlösten Seite der Natur zur Seite der Menschlichkeit kommen kann. Diana bekennt, dass Kasimir einen Menschen aus ihr, die „voller Haß“ gewesen sei, gemacht habe. Man kann sagen, dass Langgässer historisches Geschehen – ein deutsches KZ während des Zweiten Weltkriegs, in dem polnische Freiheitskämpfer gequält werden – enthistorisiert und dass ihre religiöse Weltanschauung in Verbindung mit ihrer Betonung der ‚Natur‘ die Grenze zwischen Täter und Opfer verwischt.

Beim Roman „Die Stadt hinter dem Strom“ (1947) von Hermann Kasack wird Natur für das ewige Gesetz gehalten und ‚Natur‘ als ‚Geist‘ sowie ‚Geist‘ als ‚Natur‘ vorgestellt. Diese Anschauung, den Geist als etwas Ewiges anzusehen, eröffnet die ‚Ewigkeitsperspektive‘, in welcher ein solches Geschehen wie die historische Judenvernichtung durch die Nazis nur ein Mosaiksteinchen in einer endlosen Vernichtungsgeschichte wäre. Außerdem werden bei Kasack die Schuldigen bestraft, doch sie werden im Namen einer ewig gültigen ‚Natur‘ bestraft. Unter dieser Weltanschauung der ‚ewig-natürliche‘ Straf-Instanz wird die konkrete historische Frage nach den Kriegsverbrechen der Nazis nicht gestellt.

Diese Textbeispiele zeigen, dass in ihnen das konkrete menschlich-geschichtliche Geschehen auf die Ebene der Natur verschoben wird. Meiner Meinung nach war diese Erzählweise des Holocausts, d.h. also den Holocaust im Schema der den Menschen überlegenen ‚Natur‘ zu erzählen, nur für diesen bestimmten Zeitabschnitt der frühen deutschen Nachkriegsliteratur, bis etwa 1965, gültig. In den 1960er Jahren gab es Wendepunkt zu einer anderen, dokumentarischen Art der Holocaust-Thematisierung, wie dies vor allem bei Peter Weiss dann zu finden ist.